

氏 名	KOUNG NYUNT コウン ニュン
学位の種類	工 学 博 士
学位記番号	工 博 第 586 号
学位授与の日付	昭 和 54 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	工 学 研 究 科 建 築 学 専 攻
学位論文題目	STUDY ON JAPANESE TRADITIONAL LIVING SPACE AND LANDSCAPING (日本の伝統的居住空間と景観に関する計画的研究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 巽 和 夫 教 授 川 上 貢 教 授 西 川 幸 治

論 文 内 容 の 要 旨

わが国にはすぐれたランドスケーピングの伝統的手法がある。ランドスケーピングは、日本では「造園」と訳されている場合が多いが、厳密には「修景」とでもすべきもので、建築空間と戸外空間を一体のものとしてデザインする手法であるといえる。西洋において建築の内部空間と戸外空間との関係が重視されるようになったのは、今世紀になってからのことであるが、日本では数世紀以前からその関係の重要性が認識されており、実際に生活空間のさまざまな面で巧みに工夫されてきている。

このような日本のランドスケーピングは、日本の個有な伝統と文化に立脚していることは論をまたないが、そこには、諸外国においても適用可能な手法上の原則が存在するものと考えられる。

本論文は、日本のランドスケーピングについて、これを諸外国に導入可能な一般的手法として、建築学的観点からいかにとらえるべきかについて考察したものである。

本論文は、3部14章の本文と序論・結論から構成されている。

第1部では、まず日本のランドスケーピング、特に庭空間のデザインに関する歴史的な考察を行なっている。古代における前方後円墳などの古墳は、日本における修景デザインの原初であると考えられるが、それ以降、庭空間デザインの伝統的手法が確立された江戸時代までについて、その手法の変遷をあとづけている。

次いで、現存の著名な庭園を事例として、ランドスケーピングに用いられている諸要素、諸手法の分類とその役割について論じている。日本のランドスケーピングにおいては、ある主題を表現するうえで、空間の大きさにこだわらない一貫したものをもっている。それは、空間構成における遠近法、通景、構成要素のいずれをとってみても、人間的尺度の感覚から生みだされたものであること、また、塀、垣、門、飛石、橋、石組、石燈籠など、豊富な修景材料の存在がこれを可能にしていることを明らかにしている。

第2部においては、京都及び福島県喜多方の伝統的な都市住宅(町家)を事例に、居住空間と一体となった庭空間の利用実態について考察している。日本人の生活は、大きく「ケ」と「ハレ」の生活に分けら

れる。居住空間にもこれに対応して「ケ」と「ハレ」の空間を見出すことができる。これは庭空間においても同様である。通り庭は、「ケ」の庭空間であり、座敷に面した庭は「ハレ」の庭空間である。京都・祇園祭にともなう行われる屏風祭の調査に基づいて、こうした祭に際してみられる「ケ」の空間から「ハレ」の空間への臨時的な変容を通じての空間の使い替えの態様に考察を加えている。

「ケ」と「ハレ」の庭空間のほかに、これらの分類ではとらえることのできない庭空間が存在する。それは、京都の町家における茶庭、喜多方の町家における舞を見せる庭空間などである。これは、洗練された美的な趣味の生活のための空間である。これを「スキ」の空間と定義づけた。

第3部は、ランドスケーピングの都市計画的観点からの考察、及び、ランドスケーピングの近代化・国際化についての考察である。居住空間と一体となった外部空間の実態を、市街地の広がりの中で明らかにする目的で、京都・西陣地区を事例として、主に航空写真を用いて分析した。また京都の300戸の庭園所有者に対して、自宅の庭の管理・維持の状況等についてのアンケート調査を実施し、その結果をとりまとめている。

京都の市街地においては、建物の増築と高層化が進行し、庭園が減少している。高層ビルは新たな庭園の借景となりつつあり、庭園の景観をそこねていること、また、庭園所有者の多くは、公害から植生を守るために気を配っていることが明らかにされた。

次いで、日本における現代の庭園デザインについて事例分析を行ない、これをふまえて、著者は「砂漠の中の日本庭園」の設計を試みた。

結論においては、本研究で得られた成果をまとめるとともに、日本のランドスケーピングの手法が、諸外国においても都市デザインの範とされるべきものを持っていることを論じている。

論文審査の結果の要旨

わが国にはすぐれたランドスケーピングの伝統的手法がある。その特質は、建築空間と戸外空間とを一体のものとしてデザインするところにあり、実際にも生活空間のさまざまな面において巧みに用いられている。機能主義に偏りがちな現代の都市空間の形成に対する反省から、近年、日本のランドスケーピングの計画原理を再評価しようという機運が生まれており、また、国際的にも適用可能な手法として、諸外国からも注目を浴びている。

本論文は、日本人の生活空間と土地利用の関係にみる過去のすぐれた伝統を、今日の都市づくりのなかで再評価し、生活空間と景観を調整する計画原理を確立することを目指したものである。得られた成果の主なものを列挙すると次の通りである。

(1) 日本の庭園に用いられる諸要素が、限られた空間のなかの自然らしさ、強さ、単純さ、人間的尺度などで構成されることを論じ、また古代より近代に至る日本の庭園の歴史的流れを追跡し、その地割や形式手法の変遷を論じている。そして日本の伝統的庭園を特徴づける要素として、塀、垣、門、園路、橋の種類と手法、園内に添景として配置される石組や石造物、樹木などの組合せ、また水を利用した演出と効果、さらに遠近法や借景による演出などを指摘している。

(2) 日本人の伝統的生活空間、特に都市における町家住居における敷地地割と建物の配置、住居内部の

間取と中庭や裏庭を活用した庭景観の関係について、京都市西陣地区と福島県喜多方市の民家の実態調査を通じて考察している。すなわち、日本人の生活は、(a)ケ(藝)：ふだんの日常生活、(b)ハレ(晴)：儀式にかなった正式のあらたまった生活、(c)スキ(数寄)：洗練された趣味の生活、の三者に大別されており、それらの区別に応じて生活空間が分けられている。それらのうち特に京都の町家における「スキの空間」は、そのほとんどが茶室、茶庭を中心に構成されており、それらが空間として分化されている場合と、同じ空間を時間によって「ケ」にも「スキ」にも使い分ける場合のあることを明らかにしている。つまり、日常の生活の営みのなかで、限られた土地の有効利用のために工夫された生活様式と空間のすぐれた演出手法の存在を、伝統的町家の事例研究を通じて明らかにしている。

(3) 京都市における盆地としての地勢的特性と庭園の関係を論じ、京都の市民が市中に多く存在する諸庭園を愛し誇りとしていることを強調し、庭園所有者へのアンケート調査によって、庭園に対する所有者の意識、維持管理の実態を把握し、今日の都市環境や経済的条件の変化に対して、庭園の維持管理に多くの配慮をしている現況を明らかにしている。また、京都市西陣地区を対象に、市街地再開発の進行によって在来の伝統的町家の建替えによる消滅とビル化が増加し、あるいは、土地の合併を伴う敷地・建物規模の巨大化によって、伝統的町家の大量消失と地割の変化が地区の生活環境や町並景観に大きな変化を生じていることを指摘し、かつての伝統的町家に見出される住空間に庭園空間を適度に配置し、生活環境の向上と土地利用の効率化に努めた先人の経験と手法を地域の近代化のなかにとり入れた計画手法こそが、今後の町づくりに最もふさわしいことを提言している。

以上を要するに、本論文は、わが国の伝統的なランドスケイピングにおいて、生活空間と庭園の関係に見出される限られた土地面積の過不足なき十全の利用、住空間に盛込まれた景観の多様で豊かな演出と調整が、建築及び都市のこれからの計画・設計に大きく役立つことを明らかにするとともに、それらがすぐれた国際性を有することを論じたものであり、学術上、實際上寄与するところが少くない。

よって、本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。